

【海外留学レポート】

ワシントン DC への大学院留学

-哲学と政策と国際正義と-

Study Abroad in Washington DC: Philosophy, Policy and Global Justice

ジョージ・ワシントン大学修士 服部 保志

HATTORI Yasushi

(George Washington University, MA in Philosophy and Social Policy)

キーワード：哲学、政策

はじめに

私は、2014年8月から米国ジョージ・ワシントン大学の修士課程に在籍し、2016年5月に課程を修了した。私が在籍したのは MA in Philosophy and Social Policy というプログラムで、哲学科が主催しているが、同大学の公共政策大学院と連携したプログラムとなっている。ややこしい話ではあるが、公共政策を学んではいらぬものの、哲学科が主催しているため学位は公共政策学修士（MA）であり、公共政策大学院で取得する MPA（Master of Public Administration）や MPP（Master of Public Policy）とは異なる。現在は、日本でシンクタンクの民間企業に勤めている。本レポートでは、私が留学に至った経緯やそれまでの準備、留学中の経験等をご紹介したい。特に留学に至るまでの部分に紙面を割いているが、それは留学中のストーリーよりもそこに至るまでのストーリーにより個性があるからである。

こうして大学院留学を志した

まず、私が大学院留学にいたった経緯を時系列でご紹介したい。半生論であり、大学院留学とは直接的なつながりがないようにも見えることにも言及しているが、私自身としてはこのように解釈しているため、ご容赦いただきたい。留学や「国際うんぬん」に関心を持つようになる要因はさまざまと思われるが、私の場合は、岐阜の山の中で育ち、家族も国際的な仕事をしているわけではなかった。大学に入るまでは海外経験は一切なく、海外留学に行ってみたいという願望もなかった。強いていえば、英語や世界史が比較的好きだったり、倫理で紹介される様々な考えに興味を持っていたりしたく

らいである。

大学はもちろん日本国内だった。大学に入ってから経緯はもう少しはっきりしている。特に大学院留学に至った経緯には2つのルートがあった。ひとつは、大学に入ってから芽生えた海外への関心である。入り口は、国際協力への関心からだった。学生団体の活動で、インドや中国へ行き、西アフリカのトーゴ共和国には2ヶ月ほど滞在して現地NGOの活動に参加した。海外の優秀な学生との交流は刺激になった。こうした海外経験は、確かに留学への動機の源になったと考えている。

もうひとつのルートは、学術的な関心からだった。大学では哲学科に所属しており、倫理学や政治哲学に関心があった。ときに、当時はハーバード大学のマイケル・サンデル教授の講義が日本でも人気を博していた頃であったが、私が気になっていたのは、イエール大学のトマス・ポツゲという教授であった。ポツゲ教授は、マイケル・サンデルの批判の矛先としても有名な『正義論』のジョン・ロールズの教え子である。ポツゲ教授の『World Poverty and Human Rights』¹は、平たく言えば、世界的な貧困を正義の問題としてどう考えるべきか、そのために哲学上の問題をどう考えるかにアプローチしたもので、当時の私には衝撃的だった。私の中で、国際協力への関心と哲学への関心がここに交わったと解釈している。

トーゴでの経験を経て、ポツゲ氏の著書を読んだころには米国への大学院留学が頭にあった。これは、おそらく多くの留学志願者が直面することだと思うが、留学を志すことは（大学入学や就職を含めて）論理的に導き出した答えであるとは限らない。私の場合も、国際協力への関心と哲学への関心が結びついたからといって、留学の選択肢を選ぶのは論理的には飛躍している。とはいえ、留学に備える過程では、いたるところで「志望理由」が問われる。「理由」であって、「動機」や「内なる衝動」ではない（私は「やる気」を問題にしているわけではない）。「理由」は、論理のピラミッドにおさまる形で提示されなければならないが、留学を志すまでのストーリーはきれいな論理構造を持っているとは限らない。個人の留学ストーリーには一貫性があるとは限らないのに、「志望理由」という形で擬似的な一貫性を求められる。私は留学に進んで歩みよったが、ないはずの論理構造をなんとか繕うことには苦心したし、そうしたことをしなければ社会から承認を得られないことは理解しつつも、一種の虚しさを感じた（弁解するが、もちろんそうした審査において虚偽の内容を記載したり、発言したりしたわけではない）。

大学院留学を夢見たものの、当時の私は英語のレベルを含めて、大学院留学を行う準備ができていなかった。そこで、まずは学部生のうちに留学をしようと考えた。大学の制度を使い、2012-13年に米国ミネソタ州のセント・オラフ大学（St. Olaf College）へ交換留学をした。留学の決意をしたタイミングが悪く、学部4年次からの留学となったが、大学院留学に行くべきかどうかを判断するため

¹ 邦訳は、ポツゲ、トマス（2010）『なぜ遠くの貧しい人への義務があるのか—世界的貧困と人権』立岩真也訳、生活書院。

にも、4年次から行く価値はあると考えた。セント・オラフでは、英語や哲学の勉強は非常にためになり、学生ライフも含めて充実していた。特に倫理や哲学の授業はいつもワクワクできたし、国際正義論について概論を学ぶことができた。後述する準備の内容で触れるが、交換留学がなければ、大学院留学を実現することはできなかった。結果オーライだが、結果論でしかないという一面もあった。

こうして大学院留学に備えた

交換留学から帰国後、2013年の秋から2014年の春にかけて大学院留学の準備を進めた。ここで、大学院留学への準備についてひとつずつ整理してご紹介したい。

まず、「大学はどうやって決めたのか」という問いがある。大学選びだ。私は、もちろん国際正義論に関連した内容が学べる大学やプログラムを探していた。ここまでの経緯をお読みになった方は「どうして憧れのポグ教授のところに行かなかったのか」と問うて当然であるし、そうした自問をしたことはあるが、正直なところ「自分には行けるはずはない」と思っていたのが大きい。大学院留学を志したにもかかわらず、イェールで学んでいる自分が想像できず、それに挑戦することには臆したのであった。

次に、大学選びと同様に、「なぜ修士課程なのか」という問いもある。特に米国のアカデミアは、学部卒業時から、直接博士課程に入ることもできる。修士課程の修了は大した評価はされず、その道の専門家としてアカデミアの内外で評価を受けるには博士課程が必須である。平たく言えば、修士課程は中途半端なのだ（ただし、専門職大学院であるMBAやMPAなどは事情が異なる）。が、私は、学部卒業後からの5年間（あるいはそれ以上の年月）を博士課程に捧げる勇気はなかったし、生涯アカデミックの世界でやっていく自信もなかった。ただ、この分野について少しでも経験を積みたいというのが必要十分な目論見であった。

上記2つの事情もあって、最終的に出願したのが、ジョージ・ワシントン大学のプログラムだった。プログラムの探し方は、基本的にはウェブブラウジングだった。哲学のプログラムを探したが、特に倫理や政治哲学を濃く学べるプログラムを探した。すると、ジョージ・ワシントン大学では、政策にかかわる哲学が学べるという情報を得た。シラバスや履修可能な授業を確認し、ここなら興味のあることを学べると考えた。卒業生の進路をみると、博士課程に進学している人もいれば、政策研究機関やNGO等に就職している方もいて、アカデミアにも実務にも行ける可能性があるというのは説得材料になった。ワシントンDCという土地柄もよかった。国際機関が集まる場所であり、米国の政治・政策の中心地である。かの地で政策にかかわる哲学を学べることには、非常に興味を引いた。また、プログラムディレクターとスカイプもして、プログラム内容や留学生事情等を伺うこともできた。私はこうして集めた情報に満足して、このプログラムに行こうと決めた。

もっとよい方法で決めることもできるだろう。信頼できる学術誌への投稿から気鋭の教授を探して、

そのプログラムを受験することもできる。交換留学先や日本の大学の恩師から紹介してもらうこともできる。ただ、私は、私なりの必要十分が満たせればそれでよいと考えていた。だから、出願校は1校だけだった。結果、もっとよい留学先があるのではないかと探し回ったり、志願校を複数にすることによって準備の手間が増えたりすることもなく、ひとつのプログラムへの出願に集中することができた。これはある程度、戦略的に行ったことでもある。とはいえ、結果論であることにも変わらない。

さて、留学先が決まれば、もっと具体的な手続きが待っている。まずは、英語のスコアが必須だ。私は TOEFL-iBT を受けた。包み隠さずご紹介すれば、学部時代に初めて受けた TOEFL のテストスコアは 57 点だったと思う。交換留学のために準備をして 83 点、交換留学から帰国して 99 点になった。米国大学院の基準点は一般的に 100 点であるが、100 点未満でも条件付きで出願や入学ができる。私が出願したプログラムは、そのような条件つきが認められていたため、私個人としては 99 点あればよいと判断した。スピーキングが伸びなかった私にとって、やはり交換留学は大きかったといえる。

準備すべき書類は、他に推薦書 2 部（つまり、別々の 2 名からの推薦書を 1 部）と Statement of Purpose (SoP) が必要だった。推薦書は、1 部は交換留学先の担当教員ともう 1 部は学部時代の恩師にお願いをした。「推薦書を書いてもらえない」といった話を聞くこともあるが、幸いに私の場合は、おふたりから快諾を得た。SoP については特に決められた書式はなかった。SoP には、学部時代の国際的な活動や交換留学の経験を書いた他、国際正義論や政策にかかわる哲学への知見を深めたいという旨を書き、具体的にどの授業を履修する予定かまで記した。これまた幸いなことに、交換留学先の先生に校正をお願いすることもできた。

英語スコアも出願書類も整ったら、あとは出願するだけだが、出願とは別にお金の問題は避けて通れない。ジョージ・ワシントン大学は米国でもトップクラスに高額な授業料で知られる。当然、奨学金無しには留学に行けたとしても修了まで達成できない。奨学金については、いくつかの機関や財団に申請した。民間の奨学金はすべて落ちた。理系でもなく、特に優秀でもない私にとって唯一の望みは、日本学生支援機構の留学生交流支援制度（長期派遣）²だった。私は、2 度申請している。1 度目は冬ごろの 1 次募集で、私は書類審査を通ったが面接審査であえなく落選した。2 度目は、春か夏頃にあった 2 次募集で、運良く私は奨学生に採択された。ところで、私が奨学金の採択通知を受けとったのは米国到着後であった。採択もされていないのに米国に行くという無茶をしていたのである。無謀なことに、採択されていなければどうしたかということは全く考えていなかった。とはいえ、奨学金がどうなるかを待っていては留学を実現することはできなかった。運ということといえば、2 次募集があったこと自体も幸運だった。

もうひとつ、米国に赴くまでに行ったことをご紹介しておくべきことがある。「米国の大学院に行かなければ何をしていたのか」だ。既述の通り、私は 1 校にしか出願していない。が、それは国外に限

² 現「海外留学支援制度（大学院学位取得型）」

った話で、実は2013年中には、国内の大学院に出願をしており合格をもらっていた。これは2つの意味で戦略的に行ったことだ。ひとつは滑り止めとしての受験であるが、より重要なことは、心の余裕のためだった。米国の大学院進学がどうなるかわからない中で、お先真っ暗な状況は耐えかねないと考えた。ただ、この戦略は非常に失礼なやり方だ。本当に入学したいと思っただけで大学院を受験するのだから、褒められたものではない。おすすめはしない。

大学院留学での学び

MA in Philosophy and Social Policy のプログラムは、哲学科目、公共政策科目、その他自身の関心のある科目を3分の1ずつ履修するというユニークなプログラムだった。自身の興味に合わせてプログラムを作る余地が多分にあった。大学院留学の経験として、それぞれ簡単にご紹介したい。

哲学科目では、希望していた通り、倫理学や政治哲学を扱った授業を履修することができた。授業はすべてセミナー形式であった。「Liberalism and Social Policy」ではJ. S. ミルの『On Liberty』



写真 1 冬のDC
(ワシントンモニュメントの塔上から)

やジョナサン・ウルフの『Ethics and Public Policy』³を中心にリベラリズムの思想とそれを軸とした政策の分析・評価を行った。この授業は私のお気に入りだ。特に、担当教官が変わった経歴だったことが大きい。イギリス出身で、イギリス副首相のストラテジーディレクターを務め、その後アメリカのシンクタンクである Brookings で家族政策の研究を行っている。そこにきて哲学博士である。彼のような人になりたいという憧れを持った。「Economic Justice」という授業では、ちょうどピケティ氏の資本論が話題になっていたことから、資本論を読んだ上で経済正義としてどう考えるかを議論した。「Human Rights, Ethics, Public Policy」では、人権に関する哲学的探求と、人権政策について議論した。国際正義論に一番近いテーマであったが、この授業が一番難しかった。「Topics in Health Policy」では生命倫理や医療倫理のテーマを扱った。担当教官は、米国国家機関である National Institutes of Health にも籍を置いており、医療政策に携わっている。ES細胞の倫理問題や医療経済の倫理問題等、具体的な政策テーマに即した内容で非常におもしろかった。

公共政策科目では、ある程度履修すべき科目が決められていた。私が履修したのは、「Survey of Economics I (ミクロ経済)」、「Research Methods/Applied Statistics」、「Policy Analysis」、

³ 邦訳は、ウルフ, ジョナサン (2016) 『「正しい政策」がないならどうすべきか: 政策のための哲学』 大津津、原田健二郎訳、勁草書房。

「Political Economics in Developing Area」の4つだ。「Policy Analysis」では、シンクタンク等が担っている政策分析というのはどういうものなのかの概論であり、政策分析の一連の流れを学んだ。

選択科目では、「Economics in Policy Analysis」、「Econometrics - Policy Research I」、「Survey of International Economics」、「Health Economics and Finance」という4つの科目を受講した。最初の2つは公共政策科目で履修した科目の発展内容であり、残り2つは自身の関心分野から履修したものである。特に、医療経済の授業は、上述の医療倫理の授業と同時期に履修することができ、学びに相乗効果が得られた。

ここまで履修した授業をご紹介したが、哲学科の授業以外は、学部生であれば、その学部で履修することができる内容だ。ただ、それを政策分析に用いることに焦点が当てられていることに特徴があり、さらにプログラム全体として社会科学と倫理的・哲学的分析を統合することが目的とされる。修了要件として、ある政策について政策分析を行い、哲学的な分析を加えたレポートの提出が求められた。私は、経済学の授業を多くとったこともあり、配偶者扶養控除について、経済分析を引用しつつ、リベラリズムの立場から論じるというレポートを提出した。無事、修了を認められた。

大学院にいる間は、もちろん授業だけを受けたわけではない。好きなバスケットボールをしたり、NBAを観戦に行ったりもした。夏休みには、日本に帰国して3ヶ月間のインターンシップを行った。また、シンポジウム等にも赴き、憧れだったポッグ氏と握手を交わすこともできた。



図2 学内のバスケットボールリーグにも出場

大学院留学を経て

大学院を修了するころには、シンクタンク業界での就職を考えていた。アメリカではなく日本での就職だ。アメリカにいる間に会社へのエントリーシートを提出し、2016年5月に帰国後、面接を受けた。無事に現在勤めている会社から内定を受け、政策研究員として働いている。

さて、私が大学に入学してから大学院に入学するまでの強い動機になったのは、国際正義論への関心だった。ここまでお読みいただいた方はお気づきになったかもしれないが、その関心と留学を経た現在の仕事には、確かにギャップがある。ギャップがあるというのは、政策研究やそれに関する哲学的な考察に対する関心がないということではない。ただ、今のところは国内の政策についてのみ従事しており、研究領域として「国際正義」をカバーできていないのだ。今後は、今ある関心から出発して、そのギャップを埋めていきたいと考えている。